

氏 名：内 山 孝 子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 6 4 号

学位授与年月日：平成 2 8 年 3 月 1 8 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：生活の場における看取りケア

－ 看護師主導の特別養護老人ホームのエスノグラフィー －

An Ethnography of End of Life Care in a Nurses-led

Nursing Home

論文審査委員：主査 小 宮 敬 子

副査 高 田 早 苗（正研究指導教員）

副査 川 原 由佳里（副研究指導教員）

副査 田 村 由 美

副査 坂 口 千 鶴

論 文 内 容 の 要 旨

【研究の背景】

高齢社会を迎えた日本では、高齢者の生活、とりわけ終末期をどのように支えるかが、重要な課題となっている。多くの高齢者は、終末期における延命治療よりも自然な死を希望している。国の政策転換もあり、看取りは病院という医療の場から地域在宅という生活の場へと移りつつある。長い人生を生き抜いてきた高齢者の意向を尊重した看取りの場としての特別養護老人ホームへの期待が高まってきている。しかし、特養における看取りへの取り組みの歴史は浅く、倫理的困難さもあり、本分野における先行研究は主に看護師の困難感や多職種との連携等に関するテーマに焦点がおかれ、方法も質問紙調査が多いという限界があった。

特養という場で、看護職がどのように高齢者の生活を支え、看取りケアを行っているのか、常駐していない医師や介護職との協働、高齢者本人や家族の意思確認のあり様を含む実際を明らかにする可能性のあるフィールドワークを用いて看取りケアを記述することが必要と考えた。

【研究目的】

看護師が主導する特養における看取りケアの過程と特徴を明らかにすることである。

【研究の意義】

今後、必要性を増すと考えられる特養における看取りケアを検討する基礎的な知見となり、人生の終末期にある高齢者の尊厳ある生活を支える看護の本質を明らかにする手がかりとなる。介護施設だけでなく、医療現場における看取りケアのあり方を変えることに貢献する可能性がある。

【研究方法並びに倫理的配慮】

人間行動の社会的文脈性を重視する、マイクロ・エスノグラフィーを用いた。データ収集方法

は、特養におけるフィールドワークであり、参加観察に加え、フォーマル及びインフォーマルインタビューを行った。

日本赤十字看護大学倫理審査委員会及び研究施設の承認を得て実施した。研究参加候補者に、研究目的・方法、自由意思による参加決定、途中辞退の自由、匿名性の確保、予想される不利益とその最小化等について説明し同意を得た。入居高齢者には認知機能の低下があることから、本人と家族から同意もしくは代諾を得た。

看護職が施設長を務めている、24時間看護職を配置して看取りに積極的に取り組んでいる1特養を研究の場とした。3ヶ月間の実習の後、1年間92日のフィールドワークを行った。看護師7名を含む職員33名、高齢者11名とその家族が参加者となった。

【結果】

よいケアの実践には、「何でもあり」とする柔軟な組織文化があり、看取りケアに医療行為は必要なく高齢者の衰えをそのままに見守ることが最高の看取りにつながるという施設長の方針が浸透していた。看取りケアには、入居から看取り終えるまでの間、以下のような過程が明らかとなった。

「制限をなるべく少なくしてその人らしい生活を構築する」時期

入居当初、職員は高齢者の生活の場の変化への戸惑いを軽減させ、なじめるように見守っていた。看護師は薬を減らすなどしてこれまでの病院や老健等での生活における食事や行動面での制限制約を少なくし、規則や治療より本人の希望する生活を優先できるよう調整していた。

「その人らしく老いる生活を維持する」時期

衰えが目立ちはじめ体調面での不調が起りやすくなる時期のケアで、看護師は医療効果が見込める場合家族への受診の後押しをするなどして苦痛緩和を図っていた。看護師のアセスメントは、V.S.等の数値ではなくやりとりにおける高齢者本人の反応に重点をおき、また口腔ケア、排せつコントロール等を通して、医療を必要とする事態に陥らないよう予防的なケアを徹底していた。そのなかで看護師は本人の希望と健康管理との間で揺れ動きながらも本人の希望を大切にしていた。

「その人らしい看取りを支援する」時期

高齢者の入居から看取りを終える時期までのケアである。個々の高齢者とその家族への看取りケアは、納得して迎える看取り、家族に代わる看取り、自宅のような看取り、家族のような看取り、家族が主体となる看取りなどの主題が見出された。これらに共通して見出されたケアは、それぞれの立場でこれでよい、十分といった納得への努力、トイレでの排せつ、出前などの希望を最後までかなえる、苦痛となる検査や医療処置を避ける、家族のように傍にいる、家族のありようを大切にするなどであった。生活の場としての特養における看取りケアはまさに家族的と言えるものであり、看護師、介護職員を問わずそれぞれの高齢者に応じた看取りケアを行っていた。

【考察】

以上の結果から、本研究施設の特養における看取りケアの特徴は、「その人らしく生きようとする力を信じるケア」と「苦痛を与えないケア」にあると考えられた。「その人らしく生きようとする力を信じるケア」は、高齢者が本来持っているであろう生きる力を損なわないように、高齢者が望むことをその人に添って援助していくケアである。医療機関では難しいと考えられるこ

とも実施していくなかで高齢者の生命力を引き出している可能性が示唆された。「苦痛を与えないケア」は、苦痛を予防するケア、急かしたり強いたりしないこと、行動制限をしない、必要のない医療を受けさせないことなどであり、個々の高齢者の穏やかな尊厳ある生を支えていると考えられた。これらの特徴あるケアを通して、特養が医療機関ではないよさを生かして、人間的な関わりの場としての可能性、人間的な看取りの可能性、ひいては高齢者が自らの力で自然な死を迎えることができると考えられた。

論文審査の結果の要旨

本研究は、超高齢社会を迎えている日本が抱える重要課題のひとつに挑戦しようとするテーマであり、その今日的意義、研究の着眼点等については、高く評価される。

序論から研究目的を導き、その方法論を述べ、収集したデータから結果を述べている論述は、わかりやすく一貫性がある。膨大なデータを読み込み、目的に照らして解釈して事例ごとに結果を整理しており、看護師と高齢者や家族とのやりとり、迷いや悩み、介護職員との軋轢などがリアルに描出されており、読み応えのある結果となっている。生活の場としての特養における入所の受け入れから始まる生活ケアの一環としての看取りケアの記述に成功していると言える。認知機能の低下があるとされる高齢者の生き生きとした様子、時にユーモアをにじませ、時に自己主張を示し、ぬいぐるみへの愛情を示すなど、その人らしさが表れているのは、研究施設職員の医療に依存しない生活ケアの確かな専門性とその発揮を支える理念を、説得力をもって示されていると同時に、研究者の力量を表すものと言える。

本研究で見出された知見を 1 特養という限られた場における看取りケアにとどまらず、医療や福祉の場を越えた看護学としての知識としての可能性を広げていくことが期待される。

本博士学位論文審査会では、学位規程第 3 条により、審査の結果、博士（看護学）の学位論文のとして「合格」と判定した。その後、最終試験を行い、「合格」と認めた。